

# No. 1173

## 激突！'76 鈴鹿

177  
名取 芳太郎

— ビッグジョントロフィー —

1976年鈴鹿ビッグジョントロフィーレースは7月4日久しぶりに晴れ渡った。三重県鈴鹿サーキットで2万を越す大観衆を集め開催された。距離150キロのこのレース、鈴鹿のジュエル・シリーズの最終戦に当り、出場台数は13台。ベテランの意気を燃やす片山義美、米山次郎両選手、そして2連勝を目指す桑島正美選手と出場選手もこれまでの最高がエントリー。レースはスタートから激しいデットヒートを展開。各選手とも、スプーンカーブ、ヘアピンカーブと連続するコーナーに素晴らしいテクニックを披露。結局、ユニベックスマーチに乗った星野一義選手が鈴鹿の難所とも言える最終コーナーを見事にこなし、1着でゴール。速さでは文句なく当代随一と定評されながら、このところ不調だった星野選手、しかしこのレースでは終始マイペースでその威力を如何なく発揮、コースサイドに陣取る若者たちを魅了した。

## ある帰国

303  
五味 中洋

— 樺太残留者帰還請求訴訟 —

6月25日横浜。ナホトカからの定期船が入港した。出迎えの人々の中に33年ぶりに樺太から帰ってくる母親を待つ在日韓国人文幸子さん(60才)の姿があった。母親の金花春さん(78才)は、今から33年前の昭和18年、徴用された夫の後を追ひ、幸子さんら2人の娘を残して樺太に渡った。

そして離ればなれに暮した30年あまりの歳月。

この日、ようやく帰るとの連絡をうけ、横浜の棧橋にかけつけたのだが……。なぜかこの船に母親は乗っていなかった。

東京都足立区に昭和32年の日ソ宣言にもとづき妻を日本人に持つゆえに引揚げることのできた在日韓国人家族が住む。

樺太に連れていかれた人々の肉親の安否をたずねここを訪れる人は絶えない。今樺太には、戦時中強制徴用され、そのまま祖国に帰れない人々が4万3千人もいるという。37万の日本人は引揚げた。日本国籍をもちながら韓国人だけがなぜとりのこされたのか。去年の暮れ、ようやく日本国を相手どり裁判にこぎつけた。

7月6日東京地方裁判所。樺太残留者帰還請求訴訟の第3回公判を迎えた。弁護団の説明に、帰還を待つ在日韓国人の顔にささやかな希望がうかがえる。

文幸子さんの33年間待ちつづけた日、6月28日。母親を乗せたバイカル号が横浜港に着いた。なぜ金花春さんだけが今回帰れたのか。外務省や法務省は何も明らかにしない。サハリンには故郷に帰れる日を一日千秋の想いで待ちつづける人々がいる。